りびんぐらいぶず　令和2（2020）年7月第3号

信心を獲得するとは何か

◆ご讃題

◆信楽を獲得することは、如来選択の願心より発起す。真心を開闡することは、大聖（釈尊）矜哀の善行より顕彰せり。

（Ref 信文類(本)別序　註釈版聖典 p209）

◆「欲往生」といふは、安楽浄刹に生まれんとおもへとなり。「皆悉到彼国」といふは、御（おん）ちかひのみなを信じて生まれんとおもふ人は、みなもれずかの浄土に到ると申す御ことなり。

（Ref『尊号真像銘文』第二条、註釈版 P645）

◆はじめに

浄土真宗は「信心」一つでお救いに与るというからには、信心の中味がなんであるかを知ることが重要だと窺われます。

ところが御文を頂戴しようとすると,その中味が示されていないことが少なくありませんので、**「文に依らず義に依る」**と自らの態度をお聞かせ下さった空華学派の方針を参考にするよりほかはありません。

第十八願は、**「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信楽してわが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。」**とありますから「至心信楽欲生我国」の三心に信心は示されてあります。

信文類序の最初には、「信心を獲得することは、如来選択の願心より発起す、真心を開闡（かいせん）することは、大聖(釈尊)矜哀の善巧より顕彰せり」とあります。

「如来選択の願心より発起す］の如来とは阿弥陀如来そのお方。「選択の願心」とは、第十八願を衆生救済の王本願とお選び下さったお心ということになり、選択の願心より発起すとは、衆生がお救いに与る第十八願の三心の中核足る信楽（＝疑蓋無雑）には疑いを差し挟まずに「第十八願の仰せの通り」と頂戴するお心になるのであります。

「疑いを差し挟まずに」というのは、「相＝姿」を示す言葉ですから、何故そうなのかその本質までは頂戴し難いけれども、本質は何だと最初から何かを云々して仏意に違背す

るより、如来様は衆生(＝私)をお救い下さるのだからご本願のお心はそのまま頂戴するのが正しいと解されます。

次に真心を開闡することは、大聖(釈尊)矜哀の善巧より顕彰せり」とあります。

至心信楽欲生の三心は、**「三重出体」**として示されているのだから、信楽の本質は、如来様のまことのおこころ(至心)より出ていると頂戴することができます。

しかもそのお心を示すのに、註釈版聖典では「大聖」を釈尊とお示しになっています。なぜそうなのかは容易には分かりませんが、仰せの通りに頂戴するんだよというのが如来様のそもそものお心ですから、それに従い、それでも大聖(釈尊)が私共の気持ちを察して哀れんで善巧のお心から明らかにして下さるお心を有り難く頂戴するのが大聖釈尊に随念してそれに従うお心を頂戴すべきだというのが正しい態度ではないかと頂戴できます。

三心の内、信楽と至心を除いて、欲生について信巻の定義にないのは、なぜかという課題が生じますが、欲生は「信楽」の別開(信楽の中に元々含まれて居た)だからというのが一応のお答えになります。

ところが、尊号真像銘文第二条には、「欲生我国」の宗祖御自釈があります。

御自釈によれば、まず「欲往生」といふは、安楽浄刹に生まれんともへとなりですから、「わが国お浄土に生まれてくるんだよ」というのが如来様の大悲のお心であると頂戴することを意味します。

次に、「御誓のみなを信じて生まれんとおもふ人は、みなもれずかの浄土に到ると申す御ことなり」とありますから、如来のちかひを信じて「如来様のお心の通りに浄土に参らせて戴きましょう」と思う人は、例外なく浄土往生が叶うのであると仰せ下さって居るのであります。

◆ここまで読ませて戴くと、三業惑乱における能化巧存の主張が当時、充分に評価されたのであろうかと疑問に思われることであります。

三業惑乱とは、衆生往生は,十劫正覚の昔に決定しているから、衆生は昼寝をしておれば足りるとした「昼寝安心」の異安心に端を発します。北陸地域に「昼寝安心」の異安心が蔓延したのを案じた能化功存がそれをこそ異安心である。衆生は浄土に生まれたいと欲することこそ重要とおもうべきと主張したのであります。

信楽と欲生では、信心獲得の上では信楽の方が重要視され、欲生は、信楽の別開である

から、信楽をこそ重視するというのが、三業惑乱の勝者側の主張でありました。

問題は、昭和二十一年に発布された今日の宗制が宗学として三業惑乱の結果定められた「信心正因 称名報恩」を教学上信心として重視し、これを改めるには勧学寮の同意の上で、宗会議員の定数の四分の三以上が出席した宗会において、出席議員の四分の三以上の多数で議決しなければならないとは驚くべき固定化であります。

　学問の発展の為には、あらゆる見方に道を開いておくべきであるのに、宗門は、自らの方策でその可能性を閉じてしまっているのではありませんか。大変困ったことであります。

「信心正因　称名報恩」の弱点は、称名から聞名に到る道行きが教学上全く示されていないことであります。称名は、ともすれば自力の称名と見易い今一つの課題がありますのでそれをも合わせた本格的な学問の開発が待たれる時代ですので、いよいよ大きなリスクの取組に繋がるからです。合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会八月二日(日)二十時より
◆八月度は仏婦例会はお休みと致します。
◆正覚寺歓喜会　八月二十二日(土) 十時より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥